

新著百種

二人比丘尼
色懺悔
紅葉山人著
一 奇遇之卷
二 戰場之卷
三 怨言之卷
四 自害之卷

新蒸百種

心乃憾悔

極大之因

新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和45年10月1日 印刷

昭和45年10月20日 発行

(第4刷)

吉岡書籍店版

二人比丘尼色懺悔

尾崎紅葉著

編集 新選名著複刻全集近代文学館・編集委員会

代表者 稲垣達郎

刊行 財団法人 日本近代文学館

東京都目黒区駒場4-3-55

代表者 塩田良平

総発売元 株式会社 図書月販

東京都新宿区市谷本村町35 千代田ビル

代表者 中森蒔人

製作 株式会社 ほるぷ出版

東京都千代田区麴町3-2 相互第1ビル

代表者 荒井正大

印刷進行 東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麴町3-2 相互第1ビル

代表者 長尾義輝

印刷 (株) アロープリンティング

製本 吉田製本工業株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

新著百種序

新著百種序

拜啓「新著百種」發兌につき何事か書けよとの貴命此度承諾いたし先日以來以るくは工風を凝らし何か思ひ附相つらねたく苦心いたし候へども免もすれば戦國は喻へたく左なくば花どもと引合にいたしたく所詮ありふれたる文例のみ心に浮び差出し候程の文章も出来ずせめては「色懺悔」の原稿御示し被下候はん又は妄評を試み候はんものを天機洩しがたしとて韜みたまふ上はうれも不叶、勿論拜見に及ばずとも紅葉君の筆の縦横なるは「文庫」にて幾たびも見たる事なれば褒むるに料を欠くにはあらずさりながら艸廬は高卧せし卧龍と元帥となり

新著百種序

て撃て出し諸葛亮とはおのづからけぢめのあるべきを
同じつらに評せんは朽惜かるべしまた紅葉君も爪弾き
したまはんさるからに「新著百種」については今は一言も
言ひぬ事とし別に思ひつきし事と綴り序の代りに差上
候御採用あらば本意也匆々頓首

二月廿三日

春のや生

鷺村吉岡君

硯北

近ごろ批評家なにかし君我樂多文庫を評して文壇の梁山
泊と言はれきげにや、及時雨は果して誰か、ろは今はまだ知
りがとけれど智多星の智、武行者の勇其文章の上に炳馬た

新著百種序

り就中(人の已も廣く知れる美妙ある美妙君を除くとして)
艷麗にして古雅なる紅葉君は龍田川の音を偲ばしめ、縦横
にして澁滯なき思案外史は真に思案外の神詭ありて常に
其筆を導くかと思ふ、連山人の軽くして精妙なる誰か春連
の如しと言さらん、眉山人の得意の調格、也有か許六か、紫女
か清女か、澁きが如くして澁きも流れを、艷あるに似て艷に
かたよらず、美人の眉か、遠山か、山か眉か、山か、おぼろげ
なるがなかく、なり、叔又九華君の筆の跡、花は紅葉に似た
りとは、僻目なり、紅葉と花の相違あり、紅葉はひそみ花は胆
太し、七重に八重に咲出る姿、勇ましく、面白し、心地よし、香夢樓
緑君の筆、おちついて長閑なり、濃かき香夢の心持は斯うか、

此筆にて優なる筋をかゝれんには、讀者新緑の蔭よたつて杜鵑（ほと、きり）ときくの思ひすべし、それ又麻溪君の詩才、とりたてゝは言はずもあらなん、真美人をかいまみし人は知るなり、梁山泊といふ評いつはらず、よくもかくは揃ひしものかな、此あひだ鶯村君の察にて初めて諸君に見ゆることを得つ、夫ゆゑに世辭を言ふにはあらねど嘗て或人のいひしと異なり、道樂に小説をかゝるゝ人とは、予は露ばかりも思ふ能はず、硯友社の人々は満身都是小説なり、我文學の未來にとりては頼母しき又嬉しき人々のみ、其頼母しき人々を爪牙とし又他の諸名家とも二陣三陣に備へさせて、此たび新著百種を出すは元來何人かといふに是また走利の人にあら

新著百種序

す我文學に忠實なる友人、鷺村吉岡君なり、斯文の未來頼母
しからずや

嬉しさの餘り、硯友社の諸君、又向ひ又八方の才子に向ひ、予
が乞願ふ事のあり、願はくは文壇の梁山泊といふ榮ある名
を、狭く硯友社に用ひずして、廣く我々の祖國に用ひ、此日の
出る國をして、二十世紀のアセスとならしめよ、さりなが
らうれをせんと、ならば小主義の相違、新舊の別を問ふべき
にあらず、相共に同心志て、斯文の發揚を圖るべし、和平なら
ぬが、持前の政事に、だに大同といふ事と唱ふるものを、和平
なる文學家が、相和同せぬは、理に當らず、予は今、隠れ退き、絶
えて小説の筆を執らねど、さりどて、執らざるを願ふにあら

ず、若し執らば我拙き筆の文壇を汚さんかと憂ふるのミ修
 行して幾分か上達せば又大膽に文壇に登り諸君と共に馳
 騁せんと思ふ但し相戦はんとよはあらず、何ぞや、予が敵は
 陋劣不正の文學のみ、高妙の筆は惣て(主義に雲泥の相違あ
 るを)予が終生の友なればなりさりながら予はボルテヤ、ホ
 ーアを好まず、たどひ相並び局に當るもボンペイ、シイガル、
 クラサスの如き、又はヲクタピヤス、アントニー、レピダスの
 如きを好まず、只嬉しきはヂツケンス、サカレーの交、ゾーラ
 ドーデーの友誼、エパミノダス、ペロピダスの愛國……、こ
 れにて予が文は團圓なり、讀んでこゝに至り諸君手を拍つ
 や無や

自序

二人比立尼色懺悔成る 例の九華香夢樓思案麻溪連眉山

等わが机をとりまき言葉よりまづ大口あいて笑ひ。爾紅

葉。若氣のいたりからまたく、好色の書と著はすか。蜀

爾等鞞の塗で無光か竹光か。判断がなるか。そも色懺悔を題

にして妙齡の比立尼二人が山中の庵室に奇遇し古と語り

今を墓なみあふといふ脚色。一字一涙の大著作即ち是と薄

汚なき原稿をさし出せば手にだも觸れず腹を抱え。

扱も企圖のしほらしさよ。心根のふびんさよ。茶番狂言の飯

炊場が情なからうか悲しからうか。尺八に似た火吹竹。いか

なる音をやいだすらむ爾性諧謔。爾口善罵。なぐり書の滑稽

自序

この或は怪我の功名に見らるゝもの出来すやも計られず。
 爾が悲哀小説——盲人が深小袖の是非其器ふあらずして
 之を言ふは間違へるなり。鶻鴒は濟を過ぎす。舩は汶を渡つ
 て死す。鳥の知に如かざる紅葉毛物の愚も似たる惡太郎。勞
 して物笑ひの種となるとも我等が知る所もあらず。
 我知る處なり。爾等が知る處に非ず。向横町の東坡きのふ我
 小教へていふ。貧家は淨く地を掃き。貧女は巧も頭を梳る。ず
 いふん骨を折てやつて見なさいと。これわが宗旨ちがひの
 小説を試むる所以なり。且れ諧謔自ら喜べど涙なきに非ず。
 口よく罵れど慰言なきにあらず。さては力を盡さば縦鼻横
 目のすなる事。などか我のミならさむ。英國のシエークス

ピアといふは。鬼にもあらず神にもあらずして。一枝の筆に
 萬象此人情世態を寫して。泣くやうにも笑ふやうにも得書
 しと聞く。かれは富家ふして下男に掃かしめ。富女にして髪
 結に梳つらしむるものなれば。手細工の及ふべきにあらず
 れど。紅葉果して涙なきか。湏らくこの書發市の曉を待て世
 の看官よ問ふべし。淵を素通りしてその底に蛟龍の棲むを
 見るか。林を一目してその奥に梅檀のあるを知るか。鹿忽ば
 しのたまふなと咬二ツ三ツ。一同嘲笑していふ。天水
 桶には蛟龍湧かず。芋畠には梅檀生えず。紅葉爾が非望の著
 作は。蛟龍と天水桶よ覓めて底とぬき。梅檀を芋畠に採して
 地を荒らす。笑止くと歸りゆく。紅葉ろの影遠くなるまで

自序

見送り。やがて二三尺とびすさつて衣紋かいつくるひ。大方の君子は向つて合掌再拜して曰。拙劣の才學もとより變幻此人情を寫すに。萬分一さへうべからざるを信ず。世間の蜚わが門前此蛤今やざいたる誇大は。人を見下し罵詈に對する一圖の肝癩。ほんの内々だけの高話。眞平御免下さるべし。もし方々又惡まれ奉り。色懺悔を見てかなじがり涙を落すものは。書肆の主人ばかりなど此惡評。かの五人の耳にいらば。むごらしやわれは彼等が爲に罵殺せられむ。他人にむかつてならば。惡口雜言御心まかせ。だゝ五人へは。コレひそかにく

明治廿二年小草生月戯作堂の南軒に

紅葉山人戯誌

作者曰

一 此小説は涙を主眼とす

一 時代を説かず場所を定めず。日本小説に此類少し。いかなる味

なる味の物かど好心に試みたり。難者あらばある時ある處にてある人々の身の上譚と答ふべし

一 文章は在来の雅俗折衷おかしからず。言文一致このも

しからずで色々氣を揉みぬいた末鳳か鶏か——虎か

猫か我にも判断のならぬかゝる一風異様の文體を創

造せり。あまりお手柄な話にあらずといへど。これでも

作者の苦勞はいかばかり。それをすこしは汲分て御評

判を願ふ

判を願ふ

一對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり。
惟みるにこれと以て時代小説の談話體にせんとの作
者の野心
一前速の通り世間在來の文とは下手なりにも趣を異に
すれば。讀人一見してつらいつらといふ。作者は少しもつら
からず。我つらからざるを人々何ゆへにつらしといふ
や。専ら句讀をたよりに再讀の御面倒を請ふ

月日

紅葉山人

卷の遇奇

二比丘人色懺悔

紅葉山人著

發端 奇遇の巻

罌粟は眉目容をいれ長し。常は西施が鏡と愛して粧臺に眠り。後世なんの事は露ばかりも心よかけぬ身の。一念の恨によれ。そと刺こぼして尼になりたるころ。肝つぶるゝ業れ。……百花譜——許六

都さへ……蕭條いかに片山里の時雨あと。晨から夕まで昨日も今日も木枯の吹通して。あるほどの木々の葉——峯の松

悔 懺 色

ばかりを残りして——大方をふき落したれば。山は面瘡て衰れ
 に。森は骨立ちて凄まじく——
 茶の煙だにあがらずば。山賤も知らぬ。谷陰に誰がすむ庵。
 かくてもなを捨難き。浮世の面影のこす菱垣。疎らに結ひ繞
 らし。竹は虫食み繩朽ちたれど。杜鵑の名残惜しく取纏るま
 ゝ。流石も倒れもやらす。二本の黒木と入口のしるしはか
 り。茅葺の屋根は歳に黒み。落懸る檐風も傷はしく。風情は
 月にばかりの破壁。強くはふめぬ竹。縁切株の履腕から左へ
 三尺。其處に笕の水……水ほどにもなく絶えせぬ。阿伽桶
 に滴る音。やうく。幽に疎らになるは。桶の口凍るにや——夕
 暮の風寒し。麓路に梅香りて——叔は春窓外の山白くなれ